名古屋の「観光まちづくり」

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
山田　明（やまだ・あきら）

1．名古屋の観光を勘考する

昔から気ままに観光するのは好きだったが、観光について深く考えたことはなかった。ましてや教育や研究の対象として、観光を直接とりあげるなどと思ってもいなかった。

それが今年度から学部の総合科目として「名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光」を開講し、コーディネーター役をつとめている。この講義は「授業公開」により、二十数名の社会人が熱心に受講している。毎回、学生や聴講生の感想・コメントを読んでいるが、講義に対する満足度はかなり高いものがある。とくにＪＲ東海相談役の須田さんの二回の講義には、私も出席して熱心にノートをとったが、名古屋の観光を勘考するうえで多くの示唆が得られた。現代社会学科の自称「看板授業」である社会調査実習においても、初めて観光を調査対象にとりあげ、八人のメンバーとともに調査をつづけてきた。とくに観光客・学生あわせて一〇〇〇名近くに行ったアンケート結果が注目される。

教育面だけでなく、研究面においても観光をとりあげつつある。観光をテーマとするプロジェクトが本学の特別研究奨励費に採択され、研究所の共同研究として調査研究を進めている。いま、なぜ観光なのか。これには少し「わけ」がある。研究科長をつとめていた時に、名古屋市から地域連携の一環として観光についても「依頼」があった。こうして二〇〇六年四月からの本学の法人化にあわせて、講義や研究プロジェクトを立ち上げることになった。

そもそも観光とは何か。観光の講義のなかで須田寛さんは次のように説明していた。中国の易経に「観国之光」という記述がある。国の優れたところを心をこめて見せるという意味であり、観光は単なる物見遊山ではなく「文化的なもの」なのだ。観光に対する関心と期待が高まっており、政府も「観光立国宣言」を行い、観光立国行動計画を策定している。

講義の準備のために、観光に関する文献や資料を読んでいて興味をもったのが「観光まちづくり」である。その提唱者の一人であり、一二月に実施した講演会の講師である西村幸夫教授は、「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力あるまちを実現するための活動である」[1]と定義する。また、教授も作成に関わった東京都観光まちづくり基本指針も次のように位置づけている。「観光まちづくりとは、点在する観光資源を有機的に結びつける新たな取組みであり、地域が主体的に関わり、一体となって、地域特性を活かし、観光の視点に立ったまちづくりを行うものである。また『まち』全体の魅力を高めることにより、住む人が誇れ、旅行者が何度でも訪れたくなるような活力ある『まち』を目指すものである。」

2．名古屋のまちづくり

いま「元気ナゴヤ」が注目されている。万博後も好調な経済状況がつ

づき、名駅前にはミッドランドスクエアなどの超高層ビルが林立し、讀賣新聞は「名古屋マンハッタン」の誕生などと指摘する。その一方で、下町商店街は寂れ、周辺都市の中心市街地の空洞化が急速に進行している。一極集中的で拠点的な大規模開発により、名古屋の持続的発展は可能なのであろうか。[2]

観光の講義のプロローグで配布した名古屋都市センターによる「都市名古屋の一世紀」に次のような記述がある。「慶長の城下町建設から明治維新、そして戦災復興を経た都市名古屋の足跡は、都市計画と実践の歴史であったが、同時にそれは、古いものを壊し、新しいものを建設するという開発の論理によって押し進められて来たことを意味している。」名古屋は時期を追って市域を拡大し、今では人口二二〇万の大都市となった。区画整理による整然とした街並みと広い道路、名駅と栄に象徴される都心の繁華街、そして下町から周辺へと住宅地が広がっている。

いまから二〇年ほど前に『建築とまちづくり』という雑誌の巻頭に、「名古屋のまちづくり―過去から現在そして未来へ」という小論を書いたことがあり、要約して紹介しておこう。[3]戦前の名古屋は「軍需工業都市」としての性格をもち、徹底した空襲をうけた。戦後ただちに復興土地区画整理事業が大々的に施行され、今日の名古屋の骨格が形成された。戦災復興のモデル都市といわれたが、広い道路でまちが分断され、歴史的な遺産や古くからの景観、「下町」としての情緒が消失していった。名古屋のまちづくりの原風景をみていくには、戦災復興土地区画整理事業の光と影に注目していく必要があろう。高度成長の時代には都市が外延的に膨張して市街地が形成され、「白いまち」と形容される問題をさらにクローズアップさせていった。

現在の長期総合計画である名古屋新世紀計画２０１０は「誇りと愛着の持てるまち・名古屋をめざして」と題して、名古屋のまちづくりを方向づけている。そのなかで「まちづくりには、都市の風土と特性に配慮した都市基盤の整備をすすめるとともに、そこに住んでいる人々が自分のまちへの愛情や誇りの感情を自分の心の中に育てていくことが必要です。わがまちへの愛着を持つことにより、都市の魅力を実感し、自らのまちに誇りを持つことができます」と指摘している。

一世紀余りの名古屋のまちづくりをどう評価するか。名古屋は個性と魅力があり、誇りと愛着の持てる都市といえるであろうか。ニッセイ基礎研究所の二〇〇〇年一〇月のレポートによると、名古屋は「魅力を感じない都市・二度と訪れたくない都市」のトップである。その理由として「何もない」「あまりぱっとしない」「個性がない」といった意見があがっている。二〇〇六年に実施されたブランド総合研究所の調査によると、全国七七市の「魅力度」トップは札幌、大都市では神戸・横浜・京都などが二〇位以内に入っている。残念ながら名古屋の名前は出てこない。元気な名古屋のわりには、都市の個性や魅力などの点での評価が芳しくない。

名古屋は本当に個性と魅力に欠ける都市なのであろうか。それぞれの人間に個性があるように、個性のない都市などない。名古屋の「都市格」、個性と魅力を再発見することが求められるが、ここで大切な視点が「観光まちづくり」といえよう。

3．名古屋の観光の現状と課題

二〇〇五年度の「名古屋市観光客・宿泊客動向調査」によると、市内の主要観光三一施設の入込客数は約二八四七万人であり、前年度に比べ約九〇三万人増加した。その要因は、名古屋港イタリア村（約四三五万人）の開館、万博ささしまサテライト事

業(約三五二万人)、新世紀・名古屋城博(約一二〇万人)の開催とみられる。

観光客が最大なのは熱田神宮の約六五五万人であり、イタリア村と万博サテライト事業が三〇〇万人以上となっている。それにつづく施設は、名古屋城・名古屋港水族館・東山動植物園・愛知県美術館などである。熱田神宮の観光客の多くは、正月三が日の初詣客が大半を占めており、観光客としてカウントできるか判断に迷う。観光統計はどこまでを観光客として扱うか、自治体ごとの差もあり比較するのが難しい。ともかく昨年の名古屋の観光客は、「万博効果」もあって増加したことは、こうした統計からも明らかだといえよう。

名古屋は「観光都市」なのか。社会調査実習で最初に立てた仮説でもあったが、名古屋を「観光都市」と考えるのは少数派であろう。ふつう考えられる「観光都市」のイメージから遠いのが名古屋ではないだろうか。

だが観光の講義において、須田さんは名古屋にも多くの観光資源があり、十分に「観光都市」に値するものを持っていると熱く語った。受講していた学生たち、それに私も最初は違和感を感じたものだが、熱田神宮から徳川御三家へとつづく歴史、江戸とは違って「武家と庶民の融合した文化」という指摘には説得力があった。近代以降も自動車などの産業遺産も豊富であり、「産業観光」の宝庫であるとの指摘も納得できるものがあった。須田さんによれば、「歴史的遺産が数多くあるのに、住んでいる人がそれを認識していない、光を見ようとしないだけなのだ」と名古屋の観光の現状を評価する。

確かに歴史・文化・まちづくりから名古屋の観光を勘考してみると、観光資源も豊富にあり、都市としての個性と魅力もあるように思える。私をふくめて住んでいる者が、観光資源についての固定的なイメージがあり、名古屋を観光という視点から見つめてこなかったのではないか。今回、学生たちと観光施設を訪ねてヒアリング、そしてアンケートを実施して、名古屋の観光について考えさせられることが多かった。たとえば元気な名古屋を象徴する名駅近くには、ノリタケの森とか産業技術記念館がある。これらは日本でも有数の「産業観光」施設といえるが、地元の人にとっても知名度をふくめイマイチの感じである。名駅からのアクセスもあまり良くなく、とにかく分かりにくい。

名古屋の観光は、資源には恵まれているものの、それが十分に活用されていなく、情報発信も不足しているのではないか。

4.「観光まちづくり」に向けて

最近のキーワードの一つに「持続可能性」がある。「持続可能な都市」をめざして、「くるま社会」からの転換や郊外化の抑制、中心市街地の活性化や「コンパクトシティ」などが政策課題として掲げられている。名古屋は産業経済面では好調に推移しており、開発ラッシュがつづいている。

これからの都市は、欧米諸国の動向をみても「ものづくり」だけでなく、文化や芸術、環境やアメニティ、交流や多文化共生というソフト面がますます重要になってきている。横浜市などは「文化芸術創造都市(クリエイティブシティ)」構想を策定し、まちづくりを進めている。名古屋市も「観光まちづくり」など新しい発想により、個性と魅力あるまちづくりを期待したい。

(1) 西村幸夫「まちの個性を活かした観光まちづくり」(『新たな観光まちづくりの挑戦』ぎょうせい、二〇〇二年、二一頁)。詳細は拙稿「『都市再生』と都市圏の構造変化」(名古屋都市センター『アーバン・アドバンス』四一号、二〇〇六年二月)を参照されたい。

(2) 『建築とまちづくり』一三〇号、一九八八年一月、二―三頁。拙稿「大都市点検・名古屋市」(『ジュリスト』増刊総合特集四〇号、一九八五年九月)も参照。